

PAVEMENT

□ グリバミル グリバミル大陸 マルケ Marche 王国領

——妖精王国 フェーレスト Ferest 首都 ヴァレスト Varesch

レイル湖の湖面が、凍りはじめた。今年も、終わりに近づき、やがて来る冬を知らせる。あいも変わらず、セーヌ Seun 様は、忙しそうな毎日を過ごしている……。妖精王国フェーレストにも、一月二五日が来ようとしている。

あの大戦から八〇〇年。フェーレストも変わりなく、平和をむさぼっている。そして、私も、この秩序良い安定した世界で、時間とこの身体を持て余しながら、平和をむさぼっている。

祭りの準備にあわただしいヴァレスト城の庭で、レナ LENA は空をポーツと見上げていた。彼女の後ろでは、多くの従者や兵士などの城の者達が、駆け回っている。そういうえば、一周後は、一二月二五日。復活祭だ。

この日は、この世界全土の人々が、種族を超え、手を取り合った日だ。善と悪さえもその隔たりを捨て戦った、そんな日だ。

「レナ殿、レナ殿——！」

後ろから、自分を呼ぶ者がある。声で解る。執事長の セロ Cello だ。

レナは、ゆっくりと振り向くと、向こうから駆けてくる老人に焦点を合わせた。頭髮も、眉も、髭も白くなったドワーフを見や

って、レナは少し不機嫌そうな表情になる。

「レナ殿、少しはあなたも手伝ってください。祭りは一周間後ですぞ——！」

息を切らしながら、老人セロは、そういった。

レナは、身体ごとセロに向き合うと、おもむろに口を開く。

「私は、セーヌ様の近衛兵。セーヌ様の身辺をお護りするのが役目。その私が何故、祭り事の用意の手伝いなどする必要がありません。——」

レナは、開口一番そう言うと、ブイツと他の方向へ歩き出してしまった。

「レナ殿——！ わがままは許されませぬぞ。他の者は皆頑張っておられます。レナ殿も協力なさいませ！ レナ殿——！」

セロの叫び声をヨソに、レナはスタスタと庭の向こう側へ歩いていってしまった。セロの長い長い溜息が、冬の空へ吸い込まれていく。

「レナ殿は、毎年祭りを楽しみにしておられたのに、最近どうしたと言うのだ……。——」

それから、セロはその溜息に混じりながら、そうつぶやいて、自分の持ち場へと、戻っていった。

平和すぎるからです……。

レナは、後ろでかすかに聞こえていた、セロのつぶやきに対して、心の中でそう応えた。

それはともかく、とりあえず自分もセロにあれだけ偉そうなことを言ったのだから、セーヌ様の所に行かなければ……。レナはそう思い、セーヌを捜した。精霊達によると、彼女は今、自室で何かしているらしい。

レナは、セーヌの部屋をイメージすると、そこへテレポートを
行く。

レナの身体が、一瞬明滅したかと思うと、フツと消える。

その瞬間、ヴァレスト城の丁度真ん中に位置する、セーヌの部
屋の入口に、レナの身体がヴンとテレポート・アウトした。セー
ヌの部屋には、レナがはった魔法障壁があるので、迂闊にテレポー
トやディメンション・ドアなどで飛び込むと、ひどい目に合う。

レナは、つまらなそうな表情のまま、セーヌの部屋に踏み入れ
る。

魔法障壁が、レナの身体に触れて、微量のエネルギーを飛ばす。
本来、セーヌの部屋にドアはない。魔法的な力によって、城の厚
い壁に穴が開けられているのだ。それが、ドアとなっている。い
や、正確に言うと、通路なのだが……。

「セーヌ様？」

レナは、セーヌの名を呼んだ。

「レナ？」

部屋の向こうから、透き通ったきれいな声が返ってくる。ムラ
のない、スラーだ。

レナは少し安心すると、そのまま声の返ってきたほうへ歩み寄
る。ありとあらゆる装飾品で飾られたこの部屋は、確かに女王に
ふさわしい内装だ。

「ここよ。」

赤いカーテンの向こうから、顔だけを出して、妖精の女王セー
ヌは、鎧に身をつつんだレナを迎えた。レナは落ち着いた様子で、
セーヌの所までゆっくりと歩いて近づく。

「なに？ レナ。この忙しいのに……。」

セーヌは、チェストから色々な装飾品を出し散らかしながら、
レナに話しかけた。

「あなたも、少しは、みんなを手伝ったら？」

そして、そう言葉を付け加える。

レナは、先ほどのセロと、同じことを言われたので、少しムッ
としたが、気を取り直して、口を開いた。

「いえ、私は別に……。セーヌ様の身辺警備が私の務めです。目
の届く所についていなければなりません……。」

レナは、今ごろのように辺りに気を配りながらそういうと、セ
ーヌの方へ視線を向けた。セーヌと目が合う。

セーヌは、ニッコリ笑って、手に持っていた真珠のネックレス
を自分の胸に当てがってみせた。

「有り難う、レナ。嬉しいわ。私も、あなたといると、何故か落
ち着くの。でも、あまり深い心配はいらないわよ。あの大战以来
戦争が起きた話は聞かないし、あなたのおかげで、王室も平穏そ
のものだし。」

そして、セーヌはレナの方へ歩み寄った。レナが、安堵感たっ
ぷりの笑みを見せる。

「でも……。」

セーヌは、少し表情を曇らせて、レナを見上げた。

レナは、首をホンの少し、かしげる。

「それは、何となく、レナの力によるものが多い。力で、力を押
さえつけているような気がして……。」

セーヌはそう言って、レナから視線を外らした。

レナも、表情を堅くする。

レナ。別世界から来た、ハイ・エルフ。一千年以上前、この世

界に、何らかの原因で開いてしまったゲートを通ってやってきた、緑髪のエルフ。八〇〇年前の大戦の時、八人の英雄とともにその血路を開いた、名のない英雄として、裏の世界で知れ渡っている。またの通り名を、一〇人目の英雄。

その背丈は、一九〇cm。白い肌と深緑色の髪、黄金の瞳。そしてそのほっそりした身体の中には、多くの力が秘められている。それは神の領域に触れ、神々を震撼させるほどだ。彼女は、この世界において、かなり高いレベルに存在しているのである。

何も知らない人々は、彼女のその絶大な力を恐れている。そして、誰もこのフェーレストに手を出す者はいない。

セーナは知っているのだ。このレナの絶大な力が、自分を含め、このフェーレストを守っていることを。そして、それは、ただ単に、力によって力を制しているに過ぎず、彼女はそのことに、何かしらの嫌悪を感じているのである。

「確かに……。しかし、致し方ありません。それは、私がいなくとも、同じことです。人が変わらない限り、力というものはある程度必要なのです。」

レナは、まるでセーナを言い聞かせるような感じで、そう言った。そして、腰にあるバスタード・ソードへ手を掛けてみせる。チャキツと言う金属の振れる音が、セーナの耳に飛び込んできた。

「まして、この国には軍隊はないのですから。」

そして、レナは目を閉じて、小さい声でそう付け加えた。

セーナはますます、表情を曇らせる。その表情は、少しおびえたようにも見え、また嘔吐を感じているようにも見えた。

レナが、それに気付き、あわてて一歩下がると、頭を下げた。「申し訳ございません、セーナ様。いらぬお世話でした。私もセ

ーナ様と同意見でございます。」

彼女がそういうと、セーナの表情が幾分和らいだ。

「気にしないで。だって、もしレナがいなかったら、私、恐くて夜も眠れないとおもうわ。」

セーナは、微笑みを浮かべながら、そう言った。

レナは、セーナの表情を見て、ホッと安心した。

それから、窓の方へ歩み寄り、その壁によりかかった。

セーナは、しばらくそのレナの仕草を見ていたが、また自分のしていたことを再開し出す。レナは、その窓から下を見おろしていた。

従者達が、走り回っているのが、ここからはよく見えた。

今度は、セーナの方へと視線を移す。

会話が一通り終わったのか、彼女はまた忙しそうに、チェストの中をゴソゴソやっている。

考えてみれば、自分のすることはそれだけだ。

レナはそう思った。セーナの目の届く範囲内において、周りを警戒し、セーナ自身を見守る。レナの仕事は、ただそれだけだ。それを続けて、もう千年近くになる。しかも、最近八〇〇年は、これという事件は起きていない。

もちろん、その方がいいのは解っている。

が、自分の身の置き所に困ってしまうのも事実だ。

前も、そんなことは考えていたが、別にさして気にはならなかった。が、最近、富みにそういうことを考えるようになってしまった。それはおそらく、自分がファイターだからなのだろう。本来の、彼女の身の置き所は、戦いの中にしかないからだろう。

レナは、そう思うと、つくづく自分自身がいやになる。が、最

近はそうでもなくなってしまう。今では、平和なことが、いやになってきているのだ。

冒険者に戻りたい。

レナは、心の中でそうつぶやいた。今日で、もう一三回目だ。

彼女がこの言葉をつぶやいたのは……。

レナは、セーナには聞こえないように、小さな溜息をついた。

レナは再び、窓から下を眺めてみた。多くの者達が、相変わらず、駆け回っている。飾りものを運んでいる者、祭り道具を運んでいる者、テントを運んでいる者、食糧を運んでいる者。誰しもが、復活祭の準備に没頭しているように見える。

「レナ、ホールに行くわよ。」

下を見おろしていたレナに対して、不意にセーナが言葉をかけた。レナは、ゆっくりとセーナの方へ首を向けた。そこには、ドレスアップされたセーナの姿がある。

が、レナにとっては、そんなおめかしした彼女よりも、普段着を着たセーナの方が好きだった。

着飾り過ぎです。

美しいことは美しいが。レナは、そんなことを心の中で思いつつも、言葉ではまったく違うことを言っていた。

「!!! きれいです、セーナ様。セーナ様のプロンドと、白いドレスが、とてもよく調和されています。城の者もきつと、驚くことでしょう。」

とても整った笑みを見せて、レナはそう言ったのである。

セーナが、クスクス笑って、顔を赤らめていた。

レナは、他人とはいっても違う誉め方をする。それは、レナが異世界から来た存在だからなのか、それともハイ・エルフがそうな

のか、レナだけがそうなのか……それは千年近く付き合ってきたセーナ自身も、未だに不思議に思う。

「有り難う、レナ。さ、行きましよう。」

セーナは、微笑んで、レナを手招きした。レナが、寄掛かっていた身体を起こし、セーナへと近づく。セーナは、レナがやってくるのを確認してから、出口へと足を運んだ。

この分だと、今日も特に何も起きそうにない。

レナは、セーナの後ろから付き添いながら、心の中でそんなことをつぶやいた。

* * *

「……………ナ。レナ……………レナ!!!」

レナは、セーナの呼ぶ声で、目が覚めた。

薄暗い明度の中に、スーッとセーナの顔がフェード・インしてくる。視界はどうも、まだハッキリしない。

レナは、そう思って、とりあえず周りを見回してみた。

もう、日は落ちているようだった。ここは、大ホールだ。

そういうえば、セーナのあとについてこのホールにきて、あまりにも退屈だったので、寝入ってしまったのだ。鎧もすっかり冷え、わずかだがそのひんやりとした感触が、レナの肌をなぞっていた。

レナは、あわてて立ち上がると、姿勢を正した。

「申し訳ありません……つい、……。」

そして、小さく、そう言った。最後の方は、小さくなりすぎて、聞き取る事が出来ない。セーナは、呆れ顔で、レナを見た。次の言葉を待っているのだろうか？

「セーヌ様……?」

レナが、おそろおそろ、セーヌに声をかける。

「部屋に戻りましょ。」

セーヌは、溜息を吐き、そうとだけ言うと、ブイッとレナに後ろを向けて、歩きだしてしまった。

セーヌ様の機嫌を損ねてしまったのだろうか?

やはり、寝入ってしまったのは、いけなかったのだろうか?

レナは、思いめぐらすが、とりあえず、セーヌのあとをついていった。

□セーヌ寢室

窓から入る月明かりは、淡くレナの半身を照らしていた。

彼女は、そこから天を眺めていた。星は、瞬きを繰り返しながら、自己を主張し続けている。季節が変わっても、変わることはない星座達。彼らは、意図的に配置されたと思えないほど、正確に空に並んでいる。

レナが生まれた世界では、季節とともに星も動き、星座も変わる。唯一変わらないのは北の空だけ……。北極星 *Pe Ralos* を中心

として、天はまわっている。

レナは、大きく息を吐いた。

彼女の左手には、セーヌの天盖付きベッドがある。

幕は、レナの方だけあいている。

「レナ……。」

不意に、セーヌがレナの名を呼んだ。

レナは、ハッとして振り返り、セーヌの方へ視線を移す。

セーヌは、寝返りを打ち、レナに背を向けた。

「レナ。私は、今のこの世界が好きよ。どんなにこの国に変化が無くても、好き。だって、みんな自分のことに一生懸命になれるし、自分のために生活することが出来る。」

レナは、ビクツツとして、椅子から立ち上がった。

何かを喋ろうとして、口を開けたが、セーヌが話を続けた。

「確かに、私たちは退屈だわ。決められたことを、毎日続けるだけ。でも、他の人達は違う。自分のしたいことを一杯出来て、人にも、国にも縛られてない。私は、それだけでも満足だわ。」

レナは、ため息を付いて、そして少し笑った。

「確かに……。私たちが、いえ、私が我慢すればいいだけです。

そうすれば、皆が……。それは解っているのです。けれども、私はこんな情況が絶えられないのです。」

半ば、自嘲気味に彼女はそう言った。

「やっと本音話を話してくれたわね。ハイエルフのガードは、堅すぎるわ。」

セーヌは、上半身を起こすと、レナの方へ向いてニッコリと笑った。

「?」

レナが、怪訝そうな表情をセーヌへと向ける。

「気付かないとでも思ってた? もう千年もあなたと付き合ってたのよ?」

セーヌは、呆れたような表情をする。

レナも、ヤレヤレッツと後ろの壁にもたれ掛かった。

「でも、あなたでさえそう感じるのだから、他にそう考える者が多くいてもおかしくないでしょうね。」

セーヌは、にわかに眉間にしわを寄せた。
「八〇〇年も経っています。もう限界です。この状態が保つていられるのは……。」

レナは、セーヌを見据えた。

「確かなの？ それは……。」

セーヌはベッドから身を乗り出して、レナの顔をのぞき込んだ。

「冒険者の、感です。」

レナは、溜息混じりに応える。

「*Marsha*の話によると、すでに、*Zodice*を始めとする、あの辺りのデーモン勢が、不穏な動きを見せていると……。」

そしてレナは、セーヌから視線を逸らし、目を閉じてそう言った。

「八〇〇年しか持ちませんでしたか……。」

セーヌも、大きいため息を付く。

「*TERRA*は、何と言っていますか？」

そして、セーヌはベッドの上へ腰を下ろした。

「*Marsha*に対してデーモン体制をとらせると同時に、テラを含む *Faruu Ezzell* 側の神々が動き出しています。」

セーヌの表情が、前に増してこわばる。

「悲しいことだわ。」

セーヌは、うなだれた。

「確かに……。」

レナは、空を見上げていた。

名のない英雄が一人。九人目の英雄と言われている。

この世界の主神。ギリシア神話で言うところの、ゼウスに相当する。

「でも、レナ。やっぱり私は、あなたの方が間違っていると思うわ。そう、退屈なのは、自分自身が退屈しているだけだと思うの。確かに、あなたにとって戦いのない世界は、イヤな世界かも知れない。けれど、だからといって戦いをして良いという法律はないわ。私たちは、その戦いをなくすために努力してきたんですもの。」

セーヌは、レナを見上げ、そう言う。

「あなたが、戦いを求めてどうするのです!？」

そして、芯のあるしつかりとした声で、レナに問いかけた。

「でも、その戦いを止めるには、私のような者が必要だった。戦いの中で育った、戦いしか知らない者の力が必要だった。結局、そんな者が築いた平和など、真の平和ではなく……。」

「いいえ!！」

セーヌは、レナが核心に触れる前に、レナの言葉を遮った。

「違うわ!！ たとえ戦いしか知らないあなたでも、その戦いを止めようと心から願ったじゃない!！ それとも、あなたは真剣ではなかったの? 本当は、戦いがなくなって欲しくはなかったの!？」

「……………」

レナは、下唇を噛みしめた。

セーヌはすでに立ち上がっており、彼女の身体は月明かりに照らされ、その後ろにうつつすらと影を落としていた。

月に照らされた彼女の表情は、まるでレナを哀れんでいるかの

ように見える。

「結局、力に抑えられた力は、その力に抵抗することしか考えないのかしら……。」

そして、セーヌは肩の力を落とし、ベッドに沈んだ。

レナは、悔しかった。

一瞬ではあるが、セーヌが憎かった。

自分自身を見透かされてしまっていたかのように思えたからである。そして、今一瞬の憎しみが、全ての戦いの元凶なのかも知れないと思った。

そう、自分たちの中に眠る、この些細な感情が、元凶なのではないかと……。

「そして、私たちは力でその力を制することしか、出来ないのかしら……。」

独り言のようなか細いセーヌの声が、レアの耳に届いていた。

「テラが、その道を選んでしまったのだから、仕方がないのかも知れないわね。それとも、それしかないのかしら？ 復活祭が、こんな日になるなんて……。」

そして、セーヌは長い長いため息をついた。

「さ、私たちも準備を始めなくては。どちらにせよ、あなたはこの城に居られないわ。」

顔を上げ、レナの顔をのぞき込んだセーヌは、そう言った。

レナが、怪訝そうに首を傾げる。

「あなた、うたた寝をしている間、寝言を言ってしまったのよ。それが、私自身を確信づける事になってしまったんだけど……、元老院は、あなたの寝言を聴いて大騒ぎだったわ。」

レナが、セーヌから視線を逸らすと顔を洪らせた。

「ほとぼりが冷めるまで、テラを手伝いなさい。マーシャの所でもかまわないわ。私にどうこう言われるよりも、あなた一人の方が、準備はし易いでしょう？」

そんなレナを見ながらも、セーヌは言葉が続けた。

「いずれやってくる、永遠のパラダイスを実現するためにも、あなたにはまだまだやらなければならないことは沢山あるのだから……。」

そして、最後にそう付け加えた。

「申し訳ありません……。」

レナは、深々と頭を下げた。

「あなたのせいじゃないわ。全ては、戦いのせいよ。あなたをその様に育てたね……。」

セーヌはレナに背を向けると、そう答えた。

レナが、ゆっくりと頭を起こす。

レナの目には、セーヌの月明かりに照らされた背が見える。その肩は、少し震えており、淡い光の中で、小刻みにぶれた……。

レナは、もう一度軽く礼をすると、セーヌを後目に、部屋の出口へと歩いていった。

鎧の揺れるかすかな金属音が、部屋の中にこだまする。

ウン!!!

部屋を出た後、レナの姿は消えた。

同時に、バツサバツサと言う、巨大な羽音がセーヌの後ろから聞こえてくる。

セーヌは、ゆっくりと窓の方を見やり、そして、天を見上げた。そこには、星空を遮る巨大なカゲが、天に向かって上ってゆくのがわかる。セーヌは、その去りゆく影の背で、優雅に緑色の髪

をなびかせるエルフの姿を認めた。

Fellumid Whizug。レナを乗せた黒竜は、振り返ることもせず、

ただ一度、天で弧を描くと、闇の中に消えていった。

「レナ……。」

小さく、セーヌがつぶやく。

* * *

「剣^{つるぎ}が、震えてるぜ。」

黒竜は、背に語りかけた。

かすかな振動が、彼の背を刺激したからだ。

むず痒いながらも、壮絶な気迫と力を感じ取る。

「フェルミド、私にも感じます。歓喜の声を上げているみたいで

すね。八〇〇年ぶりに鞘から放たれることに……。」

緑髪のエルフは、不敵な笑いを浮かべる。

「オレも、洞窟の中で眠るのは飽きたよ。レナ。」

黒竜は気持ちよさそうに滑空した。

「今年は、最高のパーティーになりそうよ。」

エルフは、一度空を仰ぎ見ると、前を見据えた。

黒竜が、後目にエルフを見やると、うれしそうに羽ばたく。

ゴッ!!!

強い風が、エルフをおそう。

闇に光る星たち。

その向こうに、何か、大きな存在が潜んでいるような気配を思

わせる。

エルフは、一瞬身震いした。

『こう言うのを、嵐の予感って言うのだろうか……。』

黒竜の羽ばたきを耳に、エルフは大剣を握りしめる。

黒竜は、一筋の矢となって、暗闇の中を駆けていった。

fade out...